

## 輸血部

### 輸血部の実態

発表者 衣川 ゆわ子

長嶋 清子

輸血部は中央診療部の一部門に属し、昭和41年8月1日に救急室を借りの住居として開部致しました。

輸血部の意義とは、患者さんが輸血を必要とした場合、優秀な血液を正確に、且つ敏速に間に合せることにあります。

年間、輸血部で取扱っている血液は大凡1500ℓで、最も使用率の高い疾患は悪性腫瘍でございます。輸血部は一般の科と異なり、患者さんと接する機会は極くまれで治療に必要な血液提供に訪れる供血者が対象となっております。

此処では予算等の関係で栄養剤、飲物等のサービスは出来ない現状にありますので、せめてもと休養室にソファを置き、絵もかけたり致しまして、御苦勞様です。どうぞ、気をお楽に、有難うございました。など御挨拶に感謝の気持ちをあらわしているつもりでございます。

採血時も針を刺す際は、失礼致します、と申し上げ又、血圧の高い方や種々の疾患に対する説明し採血後の保健指導も行なひまして喜んでいただいております。

採血する血液は優秀なものを必要としますので問診は医師の重要な業務であり、採血には苦痛、恐怖を与えることのない様、極力心がけており、皮膚からの細菌感染防止には消毒を広範囲に厳重に行ない凝血、溶血防止に吸引器、振盪器を使用、効果を上げております。

輸血用血液は摂氏4～6度に保管することが絶対条件ですので、自記温度計及び温度変化に警報ブザーのなる冷蔵庫に保管され、同時採血された検査用血液により異常を認められた場合は直ちに患者の受持医に連絡、同時に供血者にもお知らせしまして、廃棄処分と致しております。

一本の血液が輸血される迄には、受付、問診、採血検査を経ますが、此の間、些細な間違いも患者さんを危険に追いやることとなりますので緊張の連続でございます。

部長、副部長は併任で開部5年目を迎えた今、尚、専任の医師は定まらず、各科半年交替の医師の援助により問診が行なわれておりますが、異った職種の集りの中で正確、迅速を要求されますので此処に難づかしい和の問題が出てまいります。其の解決の一つとして毎週木曜日に木曜会と称する会を設け、話し合いによってお互の立場を理解、尊重して目的に沿うための手段を考え、追求前進に心がけております。今のところ、此の会は、大変効果を上げているものと思われ喜んでおりま

す。

次の問題を申し上げますと、御承知の如く輸血部は暫定の名の許に、外来棟に移って4年目を迎えております。病室、手術部に遠く尚分りにくい場所にあつて緊急時殊に夜間の採血抽出は勿論、日中の業務におきましても時間の浪費に加えて無駄な労働力を強いられることになり、所要時間を調べてみましたが、往復に必要な時間は手術部は4分余、7階迄エレベーター使用8分、階段を昇降すれば10分近くかかりまして之に抽出の時間が10分位必要となります。加えて断熱性バックに採血瓶を入れた重さは、一本約500g、8本ともなれば4~5kg近く、科によっては1日8回近くも往復しまして病室勤務者にとって過重と云えるのではないのでしょうか。之では迅速を必要とする輸血部の意義にも反することと存じます。又、採血者に関しても位置を指示する方向板はございますが、余程馴れた方でない、しばしば迷っている状態で、従つて家族は患者を置去りにして案内していらっしゃる様で此処にももっと分り易い近いところであつたらとの要望が出てまいります。

当直室にも問題がありまして、現在、外来棟1階の外来者休養室を之も暫定と云うことで与えられておりますが、外来患者に不自由をおかけしていると同時に輸血部におきましても検査室より更に3分余り離れており前述の如き支障が当然あるものと思われま。

以上が輸血部の実態でございますが、一日も早く理想的な輸血部になりますことを望んでおりますと共に努力致してゆくつもりでございます。